

博報財団 第10回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	KANASUGI Petra(カナスギ ペトラ)
在住国名	チェコ共和国
所属・役職	プラハカレル大学 哲学部 東アジア研究所 日本学学科 助教
招聘回(招聘研究期間)	第10回 (2015年9月1日～2016年8月31日)
受入機関	お茶の水女子大学
招聘研究テーマ	チェコ語・日本語における限定連体修飾の形態と捕らえ方
研究目的	研究の目的は二つあります。一つ目は、日本語とチェコ語の連体修飾の場合、相対性仮説の出張、つまり言葉の表現のしかたの相違が理解(捉え方)の相違につながる出張が適用できるか調べることです。二つ目は実用的な目的であり、チェコ語の「形容詞＋名詞」に対応する複数の日本語の形式を理論的に整理し、学習者が理解できる基本的なルールを提供することです。
研究概要:	<p>研究には、定量分析と質的な分析と二つの段階に分けて実施しました。</p> <p>第一段階では、チェコの国立コーパスを利用し、もっとも頻度多く使われる「形容詞＋名詞」の名詞句を1500句(コーパスに最も多く発生している形容詞500語に対して、それを含む最も多く発生している名詞句3句)集め、それに対応する日本語を加え、品詞・構造・修飾部分の機能(連体修飾、分類)によって分類しました。それぞれの傾向を対象とした結果、強い普遍的な傾向が認められたものの、二つの大きい相違もありました。一つ目は、日本語では、分類機能(生き物)と修飾機能(生きたもの)を異なる形式によって表す傾向が強い。二つ目は、普遍的でない部分の中で日本語の動詞の連体形が目立つということでした。</p> <p>統計的結果に基づいて、質的な分析を二つパターンに絞りました。チェコ語の純形容詞と日本語の動詞の連体形(「濡れた」、「乾いた」、「太った」とそれぞれの他の形)とチェコ語の動詞から派生して形容詞とそれに対応する日本語の動詞の連体形(「生きた」、「死んだ」、「開いた」とそれぞれの他の形)。そしてチェコ国立コーパスと現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて、各形式の使用方法の分析を行い、意味範囲を特定し、対照しました。その結果、日本語の動詞の連体形の意味がチェコ語の形容詞に比べて狭いことが分かりました。形容詞は抽象的な用法も豊かで、動詞は具体的な意味もしくはプライマリメタファーに当たる意味にとどまる傾向が強い。その原因として二つの要素を提案しています。動詞の具体的なスキーマ(例えば、変化動詞の場合、変化動詞のスキーマがあるからこそ、基本義と関係していても変化と結びつけようがない抽象的な意味までは拡張できない)と動詞の一般的な具体性です。動詞は名詞などによって表す要素を受けて一つのイメージにまとめる役割があります。実際に修飾されていない連体修飾の場合でも、結合の可能性があります。</p> <p>意味拡張における違いを品詞のスキーマ的な意味と関連できるため、品詞のスキーマは捉え方にも影響を及ぼすと考えられます。ただし、この影響の具体的なすがたについては意味拡張分析に基づいて、具体的に説明できませんので今後は異なる方法で取り上げる予定です。</p>
展望:	<ul style="list-style-type: none"> ● Cog Ling in Brno 2016(10月17日～19日)「品詞の特長による意味拡張への影響」発表、論文 ● カレル大学の論文集(2017年出版計画) 「The Round Taste or Spicy look – Taste-related Synesthetic Expressions and Their Diversity」論文 ● Cognitive Linguistics in 2016(ポーランド認知言語学会全国大会9月22日～24日)発表、論文 ● 今井先生の「ことばと思考」のチェコ語訳 2017年出版計画